

岩手山東麓における景観の形成過程
— 防風林・牧野の履歴から

島田直明

環境フォーラム Vol.2 別刷

平成17年3月

岩手山東麓における景観の形成過程

— 防風林・牧野の履歴から

島田直明

1. 防風林研究のきっかけ—はじめにかえて

盛岡市下厨川の茨島陸橋から滝沢村砂込にかけての国道4号・282号沿線には、アカマツやカラマツの立派な防風林が見られます(写真-1, 2)。この防風林は岩手県の環境緑地保全地域「国道4号及び282号沿線」に指定されています(図-1)。

この防風林は、今の私の調査フィールドでもあるのですが、その出会いは2003年の2月でした。当時はまだ、東京のとあるコンサルタント会社でアルバイトの身分でした。いろんな縁で岩手県立大学の助手の案内をいただき、書類を提出しました。その後、運良く面接まで進み、その日に内定をいただくことができました。

面接の日は前日に盛岡入りし、翌朝電車で大学に来たのですが、帰りはバスで帰ることにしました。行きは電車だったから帰りはバスにしてみようくらいの気持ちでした。バスには午後3時くらいに乗ったと記憶しています。しばらく乗ると、進行方向右手にアカマツの並木とその向こうに緩やかな凹凸のある雪面が広がっていました。夕方に近かったこともあり、雪面はオレンジがかった金色に光って見えていました。この景色は途切れ途切れになりながらも随分長い間見ることができました。思わず見惚れてしまいました。「大学の近くにこんな綺麗なところがあるなんて、何て恵まれたところに就職することが



写真-1 防風林と岩手山
雪原部分は家畜改良センター
岩手牧場



写真-2 国道4号からみた防風林の様子
分れ南交差点南側地点

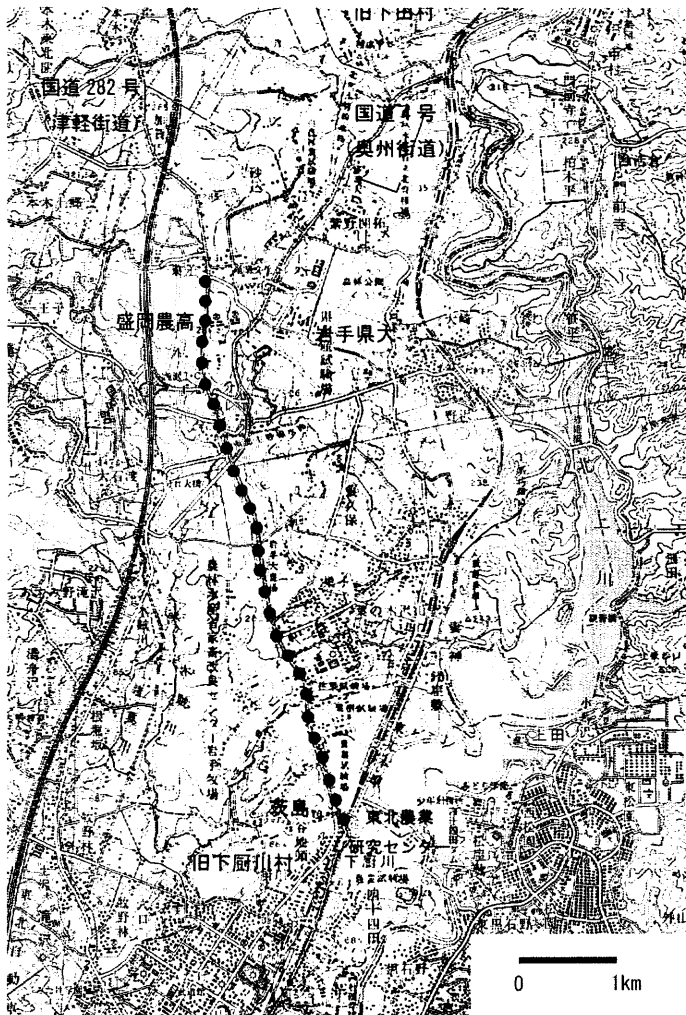


図-1 県環境緑地保全地域「国道4号及び282号沿線」概況図。
点線部分が保全地域指定箇所。図土地理院刊行 1/50,000
(盛岡)を一部改変。

の成果の基となった、防風林の形成過程について整理してみたいと思います。防風林はどのような歴史的背景で形成されてきたのか、周辺の景観はどのようなものだったのか、どのように変化してきたのか。このようなことについて、国道や岩手牧場を始めとする牧野の歴史などの経緯を踏まえて考えていきます。

2. 国道4号および282号の歴史的経緯

国道4号線は奥州街道、陸羽街道、函館街道と呼ばれていました。明治時代から国道として指定されており、古来より主要な道路でした。一方、国道282号線は津軽街道と呼ばれ、盛岡から鹿角や弘前を結んでいます。それではそれぞれの道路の歴史的経緯について文献などからみていきましょう(表-1)。

奥州街道(陸羽街道・函館街道)

奥州街道は江戸時代に整備された五街道の一つであり、当時の主街道として利用されていました。盛岡藩の国絵図は正保元(1644)年、元禄十(1697)年、天保七(1836)年にそれぞれ作成されていますが、いずれの図においても奥州街道は街道を示す朱色のうち、最も太い線で馬門(現野辺地町)から南

できたんだろう」と率直に思いました。そしてすぐに「まずは調査してみよう」と決心したのでした。乗っていたバスは「分れ南」経由で、もしこれが「巣子車庫」経由だったら、これほど長い間バスの中から防風林をみることはできず、気づきもしなかったかも知れません(防風林沿いを「分れ南」経由のバスで6km、「巣子車庫」経由で2.5kmほど走ります)。これも何かの運命だったようにも思います。こちらに来るようになって、この並木が環境緑地保全地域に指定されていることや、雪面だったところが家畜改良センター岩手牧場の牧草地であることを知りました。

この件がきっかけとなり、防風林の調査を始めるようになりました。その後、防風林は岩手山麓に至るところにあること知り、この2年間は夏が来るたびに、岩手山麓の防風林の植生調査に励んでいます。

この2年間の成果で、防風林の履歴により、その中に含まれている植物が異なることがわかってきました。ここではそ

表-1 街道および牧野の歴史

年号	道路関係		牧野関係		周辺の開発
	津軽街道(国道282号)	陸羽街道(国道4号)	臈子	下厨川	
1627 寛永4	「鹿角街道盛岡より田頭村迄四十余里之野道前々より並木植立之御趣意有(後略)」				
1653 承応2	雫石通栗谷川から寺田迄の一里塚の破損及び街道柳や松の見分を行う				
1800 寛政12	伊能忠敬 第一次測量				
1831-1845 天保年間	茨島 — 一本木間で並木松を植栽した記録あり(安政六年の文書より)				
1859 安政6	「下厨川村茨島より滝沢村の内一本木迄鹿角街道二十一里余之野道に旅行之者雪中目印として両側に並木松(後略)」				
1876 明治9	一等国道として「函館街道」(現国道4号)、三等県道として「県道 津軽街道」(現国道282号)として記載され				
1876 明治9	明治天皇来盛				
1881 明治14	明治天皇来盛		茨島(滝沢村臈子)に産馬事務所所有の牧野の記載あり		
1888 明治21	函館街道(奥州街道)の盛岡 — 渋民間が分レ經由に変更				
1891 明治24					盛岡 — 青森間 鉄道開設 小岩井農場 開設
1896 明治29			岩手種馬場 開設		
1902 明治35			岩手県種畜場(現・県畜産研究所) 開設		
1905 明治39					滝沢駅 開設
1907 明治40			種馬育成所 開設	岩手種馬場の厨川村移転(現・東北農業研究センター敷地)	
1908 明治41					工兵連隊・騎兵旅団の設営(観武ヶ原練兵場：厨川)
1918 大正7					厨川駅 開設
1946 昭和21			種馬育成所と岩手種馬場を併合し、岩手種畜場と名称変更		
1950 昭和25				東北農業試験場(現 東北農業研究センター) 設立	
1958 昭和33					自衛隊岩手駐屯地 開設
1961 昭和36	国道4号 改良舗装完了				
1964 昭和39	国道282号 改良舗装完了				
1968 昭和43					四十四田ダム 完成

鬼柳(現北上市)の間に描かれています。これはほぼ現在の国道4号線と同じルートとなっています(岩手県立博物館1994)。ところが盛岡—渋民間では現在のように北上川西側ではなく、東側を通過していました。先ほどの三時期の盛岡藩国絵図においても具体的な位置はわからないものの、北上川東側に街道があったことがわかります。

日本で始めて精緻な地図を作成した伊能忠敬は第一次(寛政十二(1800)年)、第二次(享和元(1801)年)測量の折に、奥州街道を利用しています。伊能忠敬の作成した「日本沿海輿地図」には盛岡—渋民間は「上田村—黒石野村—寺家村—小鳥沢—小野松村—柳平村—柏木平村—鴟市村(もんぜんじむら、現門前寺を指す)」という北上川東側の地名がみられます。このことから、当時の奥州街道が北上川の東側を通過していたことが窺えます。

さらに時代が下って明治九(1876)年、十四(1881)年の二度の明治天皇東北巡幸の際にも同様に、北

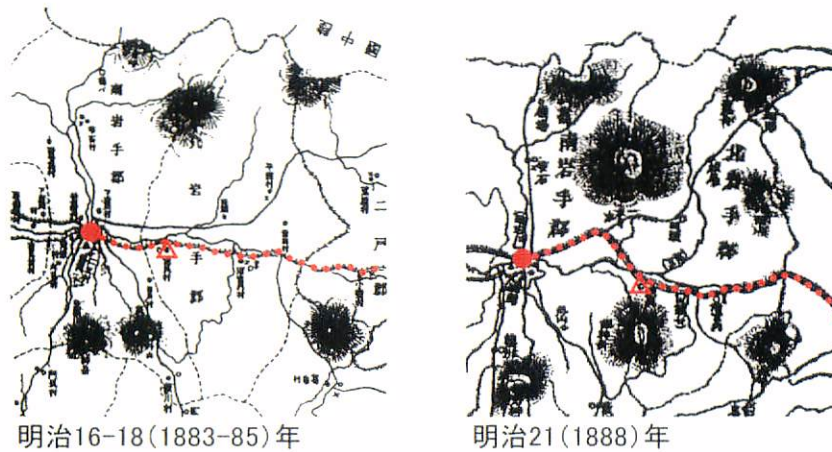


図-2 岩手県統計書にみる奥州街道の路線変更の様子
 図中の丸は盛岡，三角は渋民，点線は奥州街道を示す。

北上川東側を通過していたようです。岩手県立博物館前には巡幸を記念して「明治天皇駐蹕之地碑」が建立されています。当時青森方面への国道はこの街道しか指定されておらず、主要道として利用されていたようです。

津軽街道（七時雨街道・寺田街道・鹿角街道）

それでは現在の盛岡－渋民間の国道4号は、江戸時代にはなかったのでしょうか？まったくなかったという訳ではないようです。滝沢分レの交差点には文化四（1807）年、安政三（1856）年の碑があります。これらの碑は岩手山と鹿角方面への分岐点ということで建立されたものです。江戸時代は盛岡から下厨川、分レを経て、鹿角、津軽方面への街道として利用されていました。この街道は鹿角街道や津軽街道と呼ばれ、現在の国道282号に該当する部分になります。

ただし分レから渋民方面には街道が延びていなかったようです。明治十二（1879）年発行の岩手県管轄地誌（岩手県1879）内の下田村、渋民村、滝沢村の各村誌にも分レ－渋民の間に街道があった様子は記載されていません。

国道4号の盛岡－渋民間が分レを経由するようになったのは、いつ頃のことでしょうか。「岩手県統計書」という明治初期からほぼ毎年発行されている統計資料中の地図では、明治二十（1887）年までは北上川東側に国道が通っていましたが、明治二十一（1888）年のものからは北上川の西側、つまり分レを経由して渋民へと路線が変更になっています（図-2）。それに伴って、「道路」の項目においても盛岡－渋民間の距離が四里二十七町四十九間五尺（約18.6 km）から四里三十四町五十間ほど（年によって若干値が異なる、約19.3 km）に変更されています。この頃から国道4号が現在のルートを通るようになったようです。

環境緑地保全地域に指定されている国道は、古来より津軽街道（国道282号）として盛岡－下厨川－分レ－一本木－大更を経て鹿角、津軽をつないでいたことがわかりました。そして、明治の中頃に、奥州街道（国道4号）が現在のように盛岡－分レ－渋民間を結ぶようになったのです。

3. 防風林の形成過程

環境緑地保全地域の防風林がみられる津軽街道は古くからの街道であることがわかりました。それでは街道沿いの防風林はいつ頃から作られるようになったのでしょうか。その一端が滝沢村誌（福田編著 1974）の中から見ることができます。

●寛永四（1627）年三月廿九日

厨川通・沼宮内通・上田通御百姓共へ

鹿角街道盛岡より田頭村迄四十余里之野道前々より並木植立之御趣意有之候得共立放し候場所に牛馬之通り繁く是迄植立成木に至り兼候処日夜往来之一里使、或は余儀なき旅仕候者雪中踏迷ひ旅行難儀致候由依て此度田頭村迄並木植立被仰付右奉行村上忠右エ門、高橋左伝治、大更御新田帳付之者右手先被仰付候間此旨相心得後ニ諸人之救ニ相成候事故木数の多少によらず植付候者は御上之御趣意と相叶候末々小百姓共迄も心得左之通追々植付可申候

厨川通 夕顔瀬片原町先より沼宮内御代官所田頭村迄野道巾二十間にいたし一尺位迄之小松其間三間程位に植付可申

但小松は手寄の場所より取可申其筋へ断るに不及候尤植候節根へ廻り四五尺四方芝クレ切廻し野火之防に相成候様心懸可申候

鹿角街道の盛岡市夕顔瀬から西根町田頭までの間を巾二十間（約 36 m）にして、一尺（約 30 cm）程度の松を三間（5.4 m）間隔で植え付けるようにというお達しのようです。本数の多少に関わらず、小百姓にも植え付けるように呼びかけています。江戸時代の初期から街道沿いに並木が作られていたようです。

●承応二（1653）年四月一日

朔日、滴石通・栗谷川・寺田迄、一里塚破損見調、又道中脇柳松候哉、見廻候様にと、煙山七郎兵衛、今日申付（盛岡藩雜書より）

これは盛岡市厨川（栗谷川）から西根町寺田までの一里塚や並木の見回りを煙山七郎兵衛に下命されたことを示している文書です。このときすでに並木があったことが窺えます。

●安政六（1859）年三月十一日

御支配所下厨川村茨島より滝沢村の内一本木迄鹿角街道二十一里余之野道に旅行之者雪中目印として両側に並木松天保年中茅町長之助、材木町喜之助兩人にて御忠信植立、尤野火除之為広く地ふたを剥ぎ植立仕度奉存候。小松之儀ハ三ヶ年中に六千本頂戴仕度御憐愍を以願之通被仰付被下度（後略）

滝沢村老名 与兵衛
下厨川村老名 孫右エ門
御山肝入 長 治
喜右エ門

被仰付旨御勘定奉行内藤和右衛門達、有之

盛岡市茨島から滝沢村一本木の間には松並木を整備したいため、松の苗木を6,000本頂きたいと勘定奉行に訴えています。天保年間（1831-1845）に植栽したことに触れており、何度か植栽をしていたようです。

いずれも文章においても冬季の通行が困難であり、その目印として松並木が必要であったということのようです。植栽されても枯死や伐採などがあったのか、数度にわたり植栽されたのではないのでしょうか。当時は道路のために並木が果たす役割が重要であったことがわかります。

始めの記録から約400年、後の記録でも150年程度経っており、その当時から並木があったことが窺えます。今後盛岡藩の家老の日記であった「雑書」などの文献に当たり、江戸時代の並木の様子を探ってみたいものだと思っています。

4. 周辺牧草地の以前の景観

環境緑地保全地域に指定されている防風林周辺は現在では家畜改良センター岩手牧場など研究機関の作物畑や牧草地として利用されています。緑地保全地域の指定目的としては国道沿線の樹林とこれらの草地、背後の山岳がよく調和していることが理由として挙げられています。防風林と相俟って良好な景観を形成している草地の部分は、以前はどのような植生だったのでしょうか。どのようなところに街道

表-2 岩手県管轄地誌および岩手県統計書にみる環境緑地保全地域「国道4号及び282号沿線」周辺の原野

名称	東西 (km)	南北 (km)	添え書き	現在地・注釈
<u>岩手県管轄地誌より（明治十二年）</u>				
滝沢村誌				
茨島野	三十町	3.3	一里三十町 7.3	秣場ニ供ス 岩手牧場 周辺
加賀内平（カガナイタイ）野	二十三町	2.5	一里十町 5.1	秣場ニ供ス 岩手県農業研究センター 畜産研究所 周辺
大森平（オオモリタイ）野	一里三町	4.2	一里二町 4.1	秣場ニ供ス 陸上自衛隊岩手山演習場 周辺
下厨川村誌				
茨島野	十三町	1.4	二十六町 2.9	秣場ニ供ス 東北農業研究センター 周辺
下田村誌				
生出野	一里二十間	4.0	二十町 2.2	松林断続ス 生出小学校 東側
柴沢野	十三町	1.4	二十町 2.2	南北隅ニ松林アリ秣場ニ供ス 波民駅 西側
岩手郡誌				
茨島野	一里七町	4.7	二里三十町 11.1	下厨川村、滝沢村 滝沢村・下厨川村の茨島野を合わせたもの 岩手牧場・東北農業研究センター 周辺
<u>明治十四年 岩手県統計書より</u>				
厨川野	二里三十町	11.0	五里六町 20.2	下厨川村・滝沢村・下田村
<u>明治二十年 岩手県統計書より</u>				
茨島野	一里七町	4.7	二里三十町 11.0	南岩手郡
大森平野	一里三町	4.2	一里二町 4.1	南岩手郡北岩手郡
加賀野平野	三十三町	3.6	一里十町 5.0	南岩手郡北岩手郡
生出野	一里	3.9	二十町 2.2	北岩手郡
<u>明治三十八年 岩手県統計書より</u>				
茨島野	二里三十町	11.0	五里六町 20.2	岩手郡 明治十四年の「厨川野」と同じものか
大森平	一里三町	4.2	一里二町 4.1	岩手郡

が通っていたのでしょう。次は周辺の植生や景観について考えてみたいと思います（表-2）。

茨島野

前述の岩手県管轄地誌からこの周辺に関する記述を探してみると、「野」の項目に見つけることができます。滝沢村誌には“茨島野”，“加賀内平野”，“大森平野”という名称がみられ、また下厨川村誌にも“茨島野”があります。茨島野は現在の東北農業研究センターから岩手牧場にかけて、加賀内平野は岩手県農業研究センター畜産研究所周辺、大森平野は陸上自衛隊岩手山演習場周辺に該当します。いずれも秣場として利用されていたと記されています。

また明治三十八(1907)年の岩手県統計書の原野の欄には県内の一里以上の原野のリストに先駆け、特に広いものについて取り上げています。その中にも“茨島野”がみられます。以下に茨島野に関わる部分を示します。

「原野ノ大ナルモノハ・・・岩手郡ニ岩手山麓三本木野茨島野ノ原野アリ・・・岩手山麓ノ曠野ハ松林ノ處々ニ散在セルヲ見ルノミ茫々トシテ東北南ニ亘リ土性ハ第四紀古層ノ埴土及壤質埴土ナルモ岩手山噴火ノ灰分ヲ雜ヘ且腐植物ヲ含有シテ暗黒灰色ヲ呈シ重量甚輕シ尚原野中ニハ有名ナル小岩井農場，岩手縣種畜場，岩手種馬所等アリ・・・」

原野のリスト中では東西二里三十町(約 11 km)、南北五里六町(約 20 km)とあり、広大な原野があったと記されています。東端が北上川、北端が松川であるとする、西端は小岩井農場、南端は盛岡市上堂あたりということになります。前述の“茨島野”よりも広範囲を指しており、加賀内平野や大森平野を包括するものとして示しているようです。明治四十四(1911)年から大正二(1912)年にかけての地形図によれば、現在の盛岡市青山あたりまでは原野であったようなので、概ね一致していると考えて良さそうです。なお明治九、十四、十五、十六年の岩手県統計書には同じ大きさの厨川野という表記もみられますが、下厨川、滝沢、下田の各村を含むというところからも同じ地域を指していると考えられます。

この範囲には当時の滝沢村、下田村などはその中にすっぽりと入ってしまうということになるので、すべて原野であった訳ではなく、一部には人家や田畑もみられたのでしょう。しかし「松林ノ處々ニ散在セルヲ見ルノミ茫々トシテ」というように原野が卓越し、秣場として利用されている地域だったようです。つまり草地在り広く覆う景観だったようです。

この様子を渋民村(現玉山村)出身の石川啄木が短歌にしています。

いはてやま
岩手山
あき 秋はふもとの三方の
の 野に満つる虫を何と聴くらむ

(歌集「一握の砂」収録)

この詩を書いたときには石川啄木はすでに東京におりました。日記によれば、この詩を書く前日(明治四十一(1908)年八月二十八日)に岩手県出身の金田一京助と茨島からみた岩手山の美しさについて語らったらしく、「…金田一君と話したりして二時頃寝た。(中略)金田一君は明朝早々の汽車で一吋帰

国する。茨嶋の秋草の話虫の話で泣きたい位動悸がした」と記されています(石川 1978)。詩中には茨嶋の名称は出てきませんが、前日の話が引き金となって、この詩を書いたと考えるのは難しくないでしょう。茨嶋から見ると三方が野原で、その野原いっばいに虫の音が響いている様子が窺えます。この野原の正面に岩手山が鎮座している、そういう景観だったことがわかります。

研究機関の歴史

いわて銀河鉄道厨川駅から国道 4・282 号線沿いを北上すると、多くの研究機関や施設などがみられます。盛岡に近いところから順に挙げていくと、東北農業研究センター(旧東北農業試験場)、家畜改良センター岩手牧場、果樹研究所リング研究部、森林総合研究所東北支所、岩手大学滝沢農場・滝沢演習林、盛岡農業高校、岩手県農業研究センター畜産研究所、岩手産業文化センター、滝沢森林公園、岩手県立大学、盛岡大学、林木育種センター東北育種場、家畜改良事業団盛岡種雄牛センター、陸上自衛隊岩手駐屯地・岩手山演習場、と実に多くの施設があります。この中でも面積的に広い 2 つの研究機関について歴史を紐解くことによって、周辺の景観についてみてみましょう。

この中で最も歴史が古いのは家畜改良センター岩手牧場です。以下「岩手種畜牧場の沿革(土井ほか編 2005)」より、その歴史を追いかけます。明治二十九(1896)年に農商務省管轄の岩手種馬所として設立されました。明治四十(1907)年には岩手種馬所は、厨川村(現東北農業研究センター敷地)に移転し、代わって種馬育成所が設置されます。その後所属や名称の変更などがあるものの馬産のための牧場として利用され、昭和二十一(1946)年には種馬育成所と岩手種馬所が併合され岩手種畜牧場となり、岩手種馬所の土地は東北農業試験場として利用されるようになります。平成二(1990)年に岩手種畜牧場は家畜改良センター岩手牧場と、平成十三(2001)年に東北農業試験場は東北農業研究センターへと名称変更が行われ、現在に至っています。

また明治十四、十五、十六年の岩手県統計書によれば、牧畜の項目において滝沢村菓子に“茨嶋”の名称で産馬事務所所有の牧場があったと記録されています。この記録には明治十(1877)年に創立されたとも記されています。その後、牧場の項目はあるものの茨嶋の名前が見つからなくなってしまいますが、この当時から牧場として利用されていた形跡は窺えます。

一方、現在の岩手県農業研究センター畜産研究所や岩手県立大学の敷地にあたる土地は、明治三十四(1901)年に岩手県種畜場として設立されたのが始まりです(岩手県統計書より)。その後、何度かの名称変更や土地の増減を経て、岩手県農業研究センター畜産研究所となっています。

いずれにしても広大な茫々とした原野であったところを、草地として利用していたようです。そして現在でも各研究機関の牧草地や畑地として利用されています。野原であった頃とはみられる植物は異なっていたと思われませんが、今も昔も草地であったことは変わりなかったようです。

いずれの牧場においても開設にあたり、家畜(牛馬)の脱走や人の行き来を助けるために土塁を築き、防風林が造られました。防風林にはアカマツやカラマツが利用されました。土塁については明治四十四(1911)年から大正元(1912)年当時の地形図に多く描かれており、高さが 1.3-1.5 m 程度であったと記録されています。現在でも試験場の周辺にはその一部をみることができます。現在みられる防風林は 80-90 年生の樹木が多いことも、施設開設時に植栽されたことを裏付けています。

5. 戦後開拓の歴史

滝沢村柳沢地区や一本木地区では戦後の緊急開拓事業で国有林の開放を受け、多くの開拓農家の方が入植されました。この国有地は「茨島野」の一部に該当し、森林や原野であったところを切り開いて開発されました。一本木上郷地区の開拓記念碑には「昼なお暗いアカマツの林」を開拓したと記されています。

新たに造成された耕地や牧草地、道路沿いには、防風防雪のためにカラマツ林が造られました。戦後60年経つため、今では立派な樹林帯となっています。

6. 防風林のある景観の形成過程

文献調査からわかってきたことをまとめると以下のようなようになります。

江戸時代

周辺は茨島野といわれる松林が所々にみられるだけの茫々とした原野や草地で、その中に鹿角街道(津軽街道)が通っていました。街道は原野に囲まれているため、積雪時は道が隠れてしまい、冬季の通行が困難であったようです。そのため並木を整備するように藩から命令があったり、逆に地域住民から藩へお願いをしている様子が文献から窺えます。原野の中に松並木があるという景観だったようです。街道を通ると並木の向こうに岩手山がみえる景色だったのではないのでしょうか。

明治から現在

茨島野と呼ばれる広大な原野は明治中期頃から国や県の畜産系研究機関として利用されるようになり、原野は自然草地から牧草地や畑地へと変わっていきました。街道沿いの松並木は人の往来のため、伐採されることなく残されたのでしょう。さらにこれらの研究機関では敷地境界や家畜の脱走防止などのために防風林を造りました。そのため、現在でも多くの防風林を見ることができます。さらに戦後の緊急開拓事業が行われ、耕地や牧草地、道路沿いに防風防雪のためにカラマツ林が造られました。

以前は茫々とした原野の中の津軽街道沿いに帯状にみられた並木が、明治時代になり研究機関周辺を中心に土塁および防風林が造成され面的な広がりを見るようになり、さらに戦後の開拓事業によって防風林が拡大しました。このように岩手山麓では防風林—草地—山地—岩手山という組み合わせの景観が広くみることができるようになってきました。この景観の組み合わせが400年前から変わらず続いていると考えると、とても貴重な景観であると思います。

始めはバスの窓からみて、直感的に綺麗だと思った景観でしたが、このように古くからある景観ということがわかると、さらにこの景観が素敵に思えてきました。是非とも今後も残していきたい風景だと思えます。

最後に宮沢賢治もこの景観を大変気に入っていた様子が窺える作品を巻末において、この文章を終わりたいと思います。舞台はタイトルから滝沢村一本木集落の西側、現在の自衛隊岩手山演習場あたりのようです。作品は津軽街道の松並木が途切れるところから始まります。岩手山東麓には明るい牧草地や畑地、それらを取り囲むアカマツやカラマツの防風林、振り仰ぐと雄大な岩手山が間近にあります。このような景観の所で調査研究をしていること、そして大学があるということは「一体何という恩恵だろう」といつも思っています。

一本木野 「春と修羅」収録

松がいきなり明るくなつて
のはらがぼつとひらければ
かぎりなくかぎりなくかれくさは日に燃え

(中略)

薬師岱赭のきびしいするどいもりあがり
火口の雪は皺ごとに刻み
くらかけのびんかんな稜は
青ぞらに星雲をあげる

(中略)

こんなあかるい穹窿と草を
はんにちゆつくりあることは
いつたいなんというおんけいだろう

(以後略)

(1923, 10, 28)

参考文献

- 土井時久・米地文夫・増子義孝・三浦黎明・藤原隆男・菅田慶信・松本博明・後藤致人 (2005) 岩手種畜牧場の沿革。
福田武雄編著 (1974) 農民生活変遷中心の滝沢村誌。
石川啄木 (1978) 石川啄木全集 第一巻 歌集, 筑摩書房。
石川啄木 (1978) 石川啄木全集 第五巻 日記I, 筑摩書房。
岩手県 (1878) 岩手県統計書 明治9年
岩手県 (1879) 岩手県管轄地誌第一号巻之七, 十 (2003年に東洋書院より復刻されたものを使用)。
岩手県 (1883) 岩手県統計書 明治14年
岩手県 (1885) 岩手県統計書 明治15年
岩手県 (1887) 岩手県統計書 明治16年
岩手県 (1887) 岩手県統計書 明治16-18年
岩手県 (1888) 岩手県統計書 明治18-20年
岩手県 (1890) 岩手県統計書 明治21年
岩手県 (1891) 岩手県統計書 明治20-22年
岩手県 (1891) 岩手県統計書 明治22年
岩手県 (1892) 岩手県統計書 明治23年
岩手県 (1892) 岩手県統計書 明治24年
岩手県 (1894) 岩手県統計書 明治25年
岩手県 (1895) 岩手県統計書 明治26年
岩手県 (1896) 岩手県統計書 明治27年
岩手県 (1897) 岩手県統計書 明治28年
岩手県 (1898) 岩手県統計書 明治29年
岩手県 (1899) 岩手県統計書 明治30年
岩手県 (1900) 岩手県統計書 明治31年
岩手県 (1901) 岩手県統計書 明治32年
岩手県 (1902) 岩手県統計書 明治33年
岩手県 (1903) 岩手県統計書 明治34年
岩手県 (1904) 岩手県統計書 明治35年
岩手県 (1905) 岩手県統計書 明治36年

岩手県（1906） 岩手県統計書 明治 37 年
岩手県（1907） 岩手県統計書 明治 38 年
岩手県立博物館（1994） 絵図にみる岩手県。
宮沢賢治（1986） 宮沢賢治全集 1，筑摩書房。